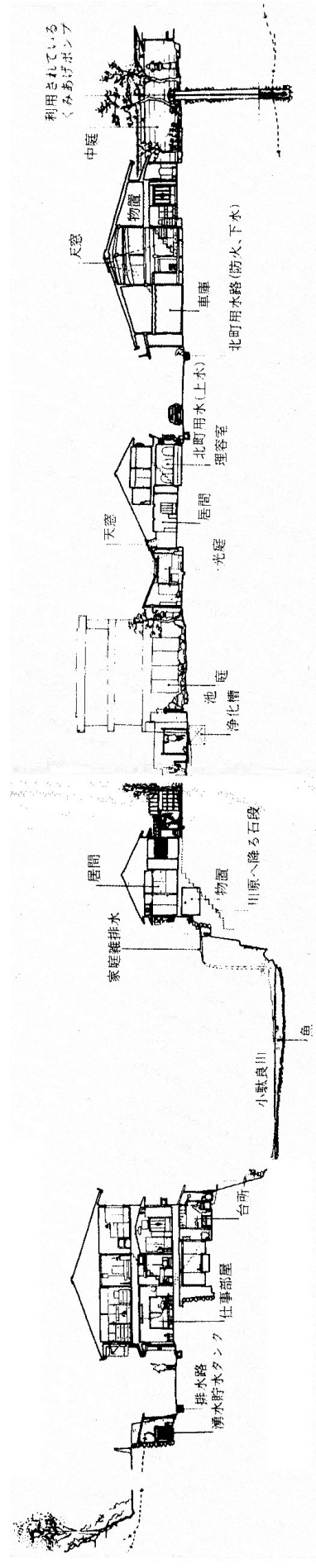


GSDy 秋真っ盛りツアー2008

郡上八幡

瞑想の森

輪中・背割堤



企画情報

- ・ 企画名：GSDy 秋真っ盛りツアー2008 郡上八幡見学会
- ・ 開催日時：2008 年 11 月 8 日（土）～9 日（日）
- ・ 開催場所：岐阜県郡上市

- ・ 講師・ゲスト： 佐々木葉教授（早稲田大学工学部）
柳町町並み保存会の皆様
武藤さん（郡上市役所）
可児さん（郡上市役所）

- ・ 企画者：中村晋一郎、大薮善久、永山悟

- ・ 企画趣旨：

近年、多くの水辺再生が取り沙汰される中、伝統的な水辺空間の再評価が高まりつつある。中でも郡上八幡は多くのデザイナー、研究者がその空間の質の高さにおいて、高い評価と賛美を贈っており、最も注目される我が国の水辺空間のひとつである。その郡上八幡の見学を通して、まちづくりやデザインを学ぶ。

- ・ 企画内容：

- ・ 郡上八幡の見学
- ・ 郡上八幡の水路掃除
- ・ 瞑想の森、輪中、背割堤の見学

- ・ 当日スケジュール：

9:00 運転係集合・車準備	7:30 起床・朝食
9:30 集合（名古屋駅 銀の時計前）・説明	9:00 八幡中坪庁舎着
10:00 名古屋駅発	柳町まちなみ保存会の方々と合流
11:00 長良川中流部着	水路掃除
昼食	11:30 掃除終了
11:45 長良川中流部発	12:00 昼食
13:15 郡上八幡着・佐々木先生と合流	13:00 自由行動
概要説明	・ 町家見学 with 佐々木先生
郡上八幡めぐり	・ 郡上八幡城内部見学
17:00 見学終了	・ 気ままにぶらぶら etc.
郡上八幡城見学	14:30 集合（城下町プラザ）、出発
19:00 懇親会	16:00 瞑想の森着
	16:45 瞑想の森発
	輪中・背割堤を巡りつつ、移動
	18:30 名古屋着・解散

成果物

・感想[参加者]

□東京工業大学大学院 大谷友香

帰りの夜行バスの中でふと、そういえば私は城下町育ちだったなあなんて思い出しました。東海道五十三次のひとつですが、特に観光地というわけでもなければ、お城が残っているわけでもありません。ただ小さな櫓があるだけです。

同じ城下町の郡上八幡。街並み・暮らし・活気・・・どれを見ても、私の地元とは全然違いました。昔から守ってきたもの、時代とともに変わっていくもの、郡上八幡で暮らす誇りのようなもの、吉田川、紅葉。これらを地元の人々に見せてやりたいです。まずは親と祖父母から。

前置きが長くなりました。前回の琵琶湖には行けず、悔しい思いをしたので今回は無理やり予定を空けての参戦でした。久々の夜行バスに乗ってもう若くないなと感じながらも、参加者の中では最年少。(もう3回目の見学会ですが、いつも最年少のような気が・・・)そしていつにも増して男臭い。自分が女であることを忘れそうになるくらいに。

名古屋駅でデッキブラシを並べて通行人の視線を独り占めした後、車で長良川へ。河川技術者中村さん(こうやって書くとかっこいいですね。笑)にいろいろ説明してもらいながら川原でお弁当。そしていざ郡上。佐々木葉先生に案内していただきながら郡上を一周。その後お城のライトアップを見てから懇親会。お風呂に入ってから2次会。朝食。水路掃除。うなぎ。町屋見学。郡上八幡には一瞬しかいなかったように思うくらいに時が経

つのが早かったです。

今回のメインである水路掃除では、保存会の皆様や、住民の方が飛び入りで指導して頂き、力いっぱい掃除してきました。街のものは皆で守るといふ本来の街のあり方を肌で感じました。そして、デザインによって住民の暮らしを苦しめることもあるということ学びました。でも何よりも、保存会の皆様や参加者の皆さんがかなり楽しそうだったのが印象的でした。住民の方には迷惑をお掛けしました。

私個人としては、こういった景観や街づくりに直接関わることはきっとないと思います。でもそれが好きでたまらないから、もし機会があれば、構造家として参加したいです。きっと近い将来、ユースメンバーが集まって仕事をするときが来ると思います。その中に自分がいたらいいな。それまでに、皆に負けなくらいに腕を磨いておきたいな。と感じた見学会でした。

企画者の方々、ドライバーの方々、デッキブラシを持ってきてくださった方々、葉先生、郡上八幡の皆様、どうもありがとうございました。全員とじっくりお話しすることは出来ませんでしたが、今年も充実した2日間でした。来年も楽しみだなあ。

■はじめてツアーに参加して

今年の夏に GSD ワークショップに参加して、建築以外でも同じ様な志をもつ人たちに出会えたことをきっかけにもっと積極的にユースにも顔を出していこうと思っていました。京都に住んでいるため、なかなか思うようにいきませんでした。そんな時にちょうど秋真っ盛りツアーがあったので思い切って参加しました。

今回、参加してみて初めて会った人たちばかりで、おまけに建築をやっている人が少なかった、自分から積極的に話すタイプでないの少し戸惑いました。今思うともっといろんなことを話したり、聞いたりすればよかったと反省していますが、またこれからどんどん自分をアピールしていこうと思います。

来年から社会人になってしまいますが、今となってはもっと早くユースに参加していれば、身が軽い学生のうちにいろんな経験ができたのにと少し後悔しています。それでも、ここでの出会いは社会に出てからこそ大事なものだと思っています。いつかユースのメンバーと仕事ができる日を楽しみにしつつ、もっと自分を高めていかなければと気持ちを新たに今修士設計に取り組んでいます。

■ 川について思うこと

まず、郡上八幡へ行く途中、お昼に立ち寄った長良川の川辺で中村さんが川の素晴らしさにはしゃいでいたのが印象的でした。自分は河川に関しては素人ですが、どうやら広い河川敷があるのが重要らしい。確かに最近、見る川には河川敷が見当たらない、身近にある鴨川でも、川縁に遊歩道

はあるけれど、護岸のすぐ側に水が流れていて河川敷らしきものはあまり無い気がします。自分が生まれ育った厚木に流れる川にはちゃんと河川敷があって、そういう川の風景が当たり前のものだと思っていたけれど、どうやらそれは稀なのかもしれません。ただ、自分は良い川を見て育ったのかなとふと思いました。

帰りに通った背割り堤は、川の真ん中を堤防が突き抜けていく感じが印象的で、車の中から見ると何か川の中を走っている様な気分になりました。土木構造物は、一見静かな佇まいをしているけれど、圧倒的な力をもつ自然をコントロールしようとするのにはダイナミックな姿が重なって見えてきます。

今回の旅行で土木から学ぶことは何かと、漠然と考えていました。まだはっきりとは言えない状態ですが、土木と建築が一体となって空間がつけられると、いい風景ができるのではないかと、ぼんやりと思っています。

■ 郡上八幡を訪れて

紅葉が美しい山奥の郡上八幡に着くと、町家が建ち並ぶ古い街並が続いていて、まちづくりがしっかり行われているまちなのかなという印象を受けました。佐々木葉先生にまちを案内され、まず印象に残ったのは、吉田川の風景でした。橋の上から見ると、谷底を流れる川の脇に美しい護岸と遊歩道が通り、所々に赤や黄色に色づいた樹々が情緒的な雰囲気を醸し出していました。川の護岸からすぐの切り立った崖の上に建ち並ぶ家屋や川岸へ降りていく石段などを見ていると、自然と土

木と建築が一体となり、違和感なく美しい風景として感じられました。ただ、建物が川に対して、開口が小さく、エアコンの室外機が置かれるなどして、裏を向いていたことは残念でしたが、全体の佇まいとしていいなと思いました。

郡上のまち歩きは、観光地を抜け、次第に観光客が訪れないまちのディープなところへ入って行きました。後で葉先生が仰っていた、そのまちを知るには氷山の一角だけ見るのではなく、水面下に潜む大きな現実を見なければならぬという様に、郡上八幡の実際の生活の場は、思っていた以上に水路や洗い場との関係が希薄になっていました。水路は車が通行しやすい様に蓋が閉じられ、洗い場は洗濯機の普及に取って代わってしまっていました。自分達の様な部外者がまちづくりに参加して、水路を残そうというのは簡単です。しかし、実際にそこで生活する人々はやはり便利で快適な生活を求めているのは訳ですから、結局、まちづくりは、きれいごとで終わってしまう危険性を孕んでいると思います。まちづくりに外の人間が関わっていく上で求められることは、現実を理解した中で、以下に客観的な視点で意見を言い、地元の人が気付かなかった切り口を示めせるかだと思います。(市の職員の武藤さんは、僕らから郡上の良いところ悪いところを積極的に聞き出そうとしていました。)

二日目の水路掃除を行ってみて、水路が残っている町内は、やはり水路がコミュニティのアイデンティティなのだと感じました。毎日一世帯ずつの当番制で、自分が掃除した下柳町の水路はかなり長い距離でしたが、それを普段は一人で行っているというお話を伺いました。掃除をしながら地元の方にやり方を教わり、これを使いなさいと

言って手渡されたデッキブラシが、自分達の使っているものよりもだいぶ柄が長く改造されていた、これだと腰が楽に掃除ができると仰っていました。なるほどこれが生活の知恵というものかと感じました。確かにみんなが口々に言っていた様に一回だけ掃除するならいいけど、これを毎月一人でやるのはさすがにしんどいと言う様に、地元の人だって同じ人間なのだからそう思っているに違いないはずです。如何に早く、きれいにそして、楽に掃除するかという欲求から生まれた知恵でした。

■ 最後に

だらだらと書き連ねましたが、今回の秋真っ盛りツアーに参加して良かったと思います、次回も是非参加したいなと思いました。いろんな人と一緒に旅をして、同じものを見て、意見を言い合うのは何にも得難い経験です。また今後のイベントを楽しみにしています。

□中央コンサルタンツ(株) 佐々木哲也

「1年に何回か通うくらい、好きな街をつくつたらいい。」

ツアー1日目の夜、郡上市の武藤さんから言われた言葉が心に残ってる。他でもなく、郡上八幡の風景を長年にわたり背負ってきた武藤さんだったから、その言葉はやわらかな郡上弁に包まれながらも、特別な重みを感じさせるものだった。

武藤さんは「やなかの小経」の設計に携わられた際、そのデザインが地域に中々理解されなくて、つぶさに説得して回った。さらには毎朝自ら率先して小経内の水路掃除をしたという。このエピソードだけでも、武藤さんのプランナー・デザイナーとしての覚悟ったら半端ないと思う。たった半日の水路掃除ですっかりバテバテの私達には到底かなわない。

そんな武藤さんが先の言葉に込めた思いは、きっと「街や風景を背負う覚悟をもて！」ということだと思う。1つの街に何度も通うとしたら、旅と

は違った立場で街に接することになる。恥もかき捨てられないし、街の一員として何か役を負うことになるかもしれない。楽しみばかりじゃないけれど、そうしてこそ、胸を張って街や風景を語るができるようになるはず。

私もまずは一步。これから1年以内に自分の街を見つけようと思う。そして20代のうちに、まず街の人達に自分の顔を覚えてもらうことを目標にしたい。更に妄想を膨らませれば、GSDyのメンバー各々がホームの街をもち、全国の街を網羅できる日がきたらいい。今回のツアーで、佐々木葉先生の開口一言目が「郡上へようこそ。」だったように、GSDyのメンバーそれぞれが自らの街を紹介し合えたとしたら、それって半端なく素敵なことじゃないだろうか。

最後に。幹事の皆様とツアーメンバーに感謝。楽しい秋の旅をありがとう。

□フリー 吉田正哉

ぐじょう？どこ？というのが今回のツアーについて聞いたときの印象でした。いろいろ説明を聞いていると、自分ひとりではまず行かないであろう場所であったので参加を決めました。

郡上八幡は水路と共に生きている街だと聞いていたので、前回の琵琶湖ツアーでも見たような街を想像していたのですが、意外と観光色が強かったことには正直驚きました。琵琶湖の針生はあくまで水路を利用した生活を伝えるというスタンスで町おこしをしていましたが、郡上八幡は観光に利用しているということの差であろうと感じました。郡上には郡上踊りなどの大きな祭りもあるので初めから観光で売り出していくつもりだったのではと思いますが。

一日目は半日かけて町中を歩き回りましたが、その中で感じたことは大きく二つあります。一つ目は言うまでもないかもしれませんが、人と水とのかかわりです。街のそばを流れる吉田川は子供の遊び場となり、そこから水を引き込む用水路には小径が設けられる。この小径における水との距離感や木の配置、すぐそこにある住宅との関わりから生まれる空間というのはすばらしいものだと感じました。このようにできたスケールはまさに郡上のスケールだと思いました。

二つ目は、建物の密度が異常に高かったことです。基本的に隣戸は密接しており、しかも三階建てになるものも結構みられました。ものによってはファサードのテクスチャがそろっていてどこで家が別れているかわからないようなものもあったのには驚きました。また、川辺の住宅は屋根の上にベランダをつけて、そこからうえに増殖してい

くようなつくりをしていて、これも特徴的だなと感心しました。

二日目には水路掃除もさせていただきましたが、これは今回のツアーの中でも非常に重要であったと自分は考えています。一日目に佐々木先生から様々な話や街の声を聞いたうえでの掃除は、ただ掃除をするのではぜんぜん違う体験になったと思っています。一日目を踏まえた上での水路掃除は、そこでの生活を今までよりもさらに想像できるようにさせたと思っています。また象設計集団がやった水路は掃除しにくいということがこの体験を通じてよくわかりました。

今回の旅行を通じて水と街との関わりのすばらしさを実感することができました。自分は北海道出身なので身の回りに水路など存在していなかったので、街の中に水が網の目のように流れていて、しかも鯉までいるような状態や、建物の密度や伝統的な建築が並ぶ様には正直驚きっぱなしでした。自分が今まで体験したことがないタイプの街に触れられたと思っています。

企画者の方々、講師の方々、一緒にツアーに参加したメンバーの皆様本当にありがとうございました。皆さんのおかげで実に楽しい2日間が過ごすことができました。次のツアーもぜひ参加したいです。

都市 郡上八幡

日本では、自分の住む街に対して帰属意識を持たない人が多く、彼らはまちづくりにも消極的だ。そういう人を、市民であることを放棄した市民だと、ある市長は言う。その市長は、”真の市民”を育てることが市長の務めだ、とも言った。

葉さんが郡上八幡を都市だと言ったのは、郡上八幡には”真の市民”が他都市と較べて、少し多いからだと思う。八幡を離れていく人が多いこと、若い人が戻ってこないことなどを考えると、やはり”少し多い”程度だろう。

“都市”は存在ではなく、営みであるから、その少しの差が、魅力的な”都市”という結果として表れているのだと思う。



川を前にすると、誰もがたたずんで、目の前の風景に想いを馳せるんだなあ。彼の10年後に期待です。



都会ではなかなか見ることのできないナナカマド。素朴な味わいです。

”都市 郡上八幡”の営み支えているのは、佐々木哲っちゃんの言葉を借りれば、住民や役所の方の「風景を背負う覚悟」。

建設コンサルタントとして「風景を背負う」とはどういうことだろうか。さまざまな街にかかわり、愛着を感じて業務に取り組むものの、その年限りの付き合いで終わることが多い。我々は仕事を選ぶことは出来ないし、自分のできることに対して、まじめに取り組んでいくことしかできない、と思っている。行政の無知・怠慢は問題だが、じっくり担当者を説得することもコンサルタントの努めだ。

しかし、その関係が1年でなくなってしまうのは、どうしてもやるせない。我々が風景を背負うことは、かなり難しいのかもしれない。



吉田川の紅葉。街並み保存会の方に聞くと、郡上八幡の紅葉はこれがピークなんだとか。厳しい冬の前の、一瞬の美しさ。

“ ずっと1つの都市でまちづくりにかかわりたい ”

以前からそう思ってきた。

僕は、街に責任を持ちたかったし、責任を持つなら、地元以外にない。この想いが強くなって、今年、地元の公務員試験を受けた(勉強しなかったために玉砕したけれど)。僕には覚悟が足りなかった。

そういう想いでいたから、武藤さんの語る言葉は、とても重く響いた。

武藤さんが、バリアフリーを満たすと風景を守れないと住民を説得したことは、ある意味で素晴らしいことだが、障害者が風景を享受することを否定しているようにも思える。おそらく、たくさんの苦労があったと思うし、我々の疑問を全て解決してくれるほどの回答を、武藤さんは持っているだろう。

武藤さんとは、もっとじっくり話をしてみたい。

<感想じゃないけど>

小野寺さんや西村さんのようなデザイナーや、武藤さんや国吉さんのような役人。

彼らは、特殊解ではなく、我々が目指す道の延長線上にあると思いたい。

ただ、彼らのようになるために、我々はこれから何をすれば良いのか。今の仕事に精一杯取り組んでいるだけでいいのか。いつもそれが空白で、我々と彼らに世代以上の大きな溝があるように思える。

自信を持って、社会に踏み出していける、そんな企画が今のGSDyには必要じゃないのかな。

3年ぶりの郡上八幡は、どこか懐かしく、けれど新鮮で、自分の将来を確信できた旅であった。

街に入り込んだ研究してる沖野は幸せだね。

忙しい中企画してくれた晋ちゃん、ありがとう。



“踊りのまち”をひっそりとPR。街の自信と誇りが感じられます。



“やなかの小路組”を除いて、先に記念撮影。地元に戻って、この人達のように生きたい、というのが僕の目標です。

□東京大学大学院 永山悟

かなり冗長になってしまって申し訳ないです。

■郡上

1 日目、佐々木先生と見学

郡上八幡の担当は僕だったので、事前に勉強し、ルートを作っておいたが、佐々木先生の案内にはそんなもの必要なかった。見学会の冊子は郡上八幡の町に着いた時点で紙くずと化した。

佐々木先生、歩く歩く。中村さん、はしゃぐはしゃぐ。

参加者達も次第にテンションが上がる上がる。

始めは佐々木先生の前で緊張していた参加者達も八幡の町全体に広がる「水利用博物館」を見て回るうちにテンションが上がる上がる。

それにしてもこの水空間は予想以上だった。「水の博物館」とも称される利水施設群。多様な水を適切な方法で利用する人々の生活がにじみだした結果生まれたデザインは総じて美しく、僕の心に懐かしさを感じさせた。さらに、ところどころに現れる「武藤デザイン」。古くからの水利施設群にも、町並みにも自然に溶け込んでいる。参加者からは何度も「む、武藤さん・・・(すげえっす)」とため息が出ていた。

一方、ところどころに出てくる「ダメなデザイン」。それらは共通して「でかい」。体育館、病院、小学校、ホテル・・・ダメだし目立つし、残念極まりない。デザインの問題でもあるし、根本の計画の問題とも言える（それは広義のデザインとも言えるが）。参加者はこれらを反面教師として今後のデザインに役立てていきましょう。

夜の懇親会は佐々木先生、佐々木研の沖野君、そしてあの武藤さんも特別ゲストで参加していただき、大いに盛り上がった。僕はあの場で「八幡町のがんばりが足りない」というような発言をしてしまったが、今となっては非常に失礼なことを言ってしまったと後悔している。

八幡町も部分的に都市化が進み、残念な場所がしばしば見られるのは事実。しかし役場の人や住民が必死に働きかけて維持・再生した結果が今の姿なのだから、それは立派な成果だと捕えるべきであった。自分は一時的な訪問者に過ぎないということをおぼえなければならなかった。反省。

2 日目、住民の方々と水路掃除

佐々木先生との町歩きより、実はこの掃除の方が心配だった。役に立ちたいと思っただけの企画ではあるが、迷惑に思われていないだろうか。本当に持参するのはデッキブラシだけで良かったのだろうか・・・。とは言え、来てしまったのだから仕方ない。とにかくやる気を見せることが大事だ！ということで、半ズボンで挑んだ。

今回協力して頂いたのは「柳町町並み保存会」の皆様だったが、僕の担当は違う地区の「やなかのこみち」だったので、住民の方々との意見交換はあまりできなかった。しかし他の参加者の話によると、なかなか感謝されて「またおいで」というありがたい言葉までもらったそうで、一安心である。

尚、やなかのこみちは最も観光客が訪れるスポットのうちの1つだが、舗装が歩道も水路内も礫岩を埋め尽くしたようなデザインであるため、「掃除がしにくい」と住民からは大反対をくらっている場所でもある。実際そこで掃除を試みたが、日常的に掃除をする住民にしてみれば確かに厄介なデザインだろうなと実感した。三島・源兵衛川のように、「水路掃除ツアー」ということで観光客に掃除してもらうような、住民の負担を軽減するようなしくみがあっても良いかもしれない。というのも、初めて掃除した僕たちはすごく掃除を楽しめたから。掃除をすると、郡上の水路が「自分達の水路」の様に感じ、

愛着の湧き方が全然違うということは新発見だった。郡上踊りのように、リピーターを増やすきっかけになるのではないかと思う。自分達もまた、掃除にきたい。

その他、気になった点

・郡上八幡はお昼は観光客で溢れかえっているが、夕方になると誰もいなくなる。それは観光客が皆、バスツアーでパッと見てパッと去っていくから。そしてそれが日本人の観光の典型。しかしそれでは郡上八幡のいいところがほとんど伝わらない。もっとゆっくり町を味わってもらえるような観光スタイルを提案してはどうだろうか(すでにしていたらごめんなさい)。そしてゆくゆくは日本全体に蔓延しているツアー観光も改善していったほしいものである。

・上のこととも関係するが、町中を走る車が気になる。郡上八幡は町並みも良く、歩くのにも適していて、大きさもコンパクトなのだから、車の規制を考えてもいいような気がする。

・郡上八幡と言えば「八幡踊り」である。しかし僕たちはまだそれを見ていない。つまり郡上八幡の半分しか分かっていないとすら言える。八幡踊りを経験して初めて町について語る資格を得るのかもしれない。

以上、最高の郡上八幡でした。

郡上市の武藤さん、可児さん、そして柳町町並み保存

会の皆様、休日にも関わらず付き添っていただきありがとうございます。今後もすばらしい郡上八幡をよろしく願います。

佐々木先生と沖野君も結局2日間ともお世話になってしまい、申し訳なかったです。しかしその分、自分達だけで味わうよりも何十倍も濃い郡上八幡を堪能できました。ありがとうございました。

■他

長良川、木曾川、揖斐川

初日は小雨の中、ピクニック(?)。川の良さはまだなかなか分からない。

鵜飼大橋は好きじゃない。柱が四角過ぎ。桁はきれい。帰りは残念ながら日没のため、輪中、ケレップ水制、背割堤はほとんど楽しめず。これは惜しい事をした。また来なければ。

瞑想の森

火葬が入っていたため、中は見られず。外から見た感じはなかなか良い。ランドスケープと建築が違和感無く存在している。

時間的にも、火葬の都合的にもじっくり見るのは難しかったが、もうちょっとしっかり設計過程やデザイン意図を見てもよかったかも。

□東京大学大学院 伊藤啓輔

ぼんやりしている旅が好きだ。特に建築や土木の設計について予備知識をもって目的のものを探しに行くより、はっきりと頭の中だけでは像を結ばないけど、なんとなく体に溜まっていく、そんな感じの方が合っている。

郡上八幡は以前訪れたことがある。その時の印象は、青々と茂った山が迫ってくることと、橋の上から見下ろした川の流れぐらい。あと、家から川へ降りて行ける階段があるのは面白そうだなと思った。大体気が抜けている時は自然のものかそれに近いものに目が行って、道や橋や水路や建物がどうやって蓄積あるいは設計されてきたかなんかは考えない。

その時も確かに水路に水は流れていたはずだし、町家の利用なんかもされていたかもしれないし、「せぎ」は使われていたはずだし、武藤さんは酒を呑みながらこれからの郡上について考えていたかもしれないし、新橋の高欄はもたれかかって川

底を望むのに丁度良かったはずだ。

ユースの旅はいつもそうだが、企画者がしっかり調べてくれるしゲストがいつも素敵なので、下調べをしなくても色々なことがわかる。今回は佐々木先生に郡上八幡という街の構成や設計のことをたくさん教わったし、あそこに住む人と、街をなんとかしようとする人にも会えた。そうして僕の中の郡上八幡という体験と記憶が、だいぶ論理的になった。いざ自分で設計をして行く上ではとても重要な経験だと思う。

伊東豊雄の建物は、正面は20歩ぐらいゆずって可として、裏側の見えない所への思いやりがないんじゃないかと思った。

唯一心残りなのは、背割り堤が見られなかったこと。ぼんやり派としては旅の最後は大きな川を見ながら夕暮れを迎えるというのが理想的だ。

最後に、永山君の会計のぼんやりぶりには、毎度のことながら改めて驚かされた。

□早稲田大学大学院 高野裕作

二度目の郡上でした。

昨年研究室で行った郡上踊りの季節とは違った表情があって、

これもまた良いものだな、とおもいました。

山々の紅葉も、朝のキリッと冷えた空気も、冷たい水も。

水路掃除の作業は、特に自分たちの担当は比較的楽なところだったようだけど

その分地元の方との会話がじっくり出来ました。

大事な資源である水路も、街並みを構成する町

屋も、上手く維持するのは

なかなか難しいという地元の現実に少し触れられた気がします。

武藤さんに言われたように、二月とか雪の降る季節、静まり返った郡上八幡も

見てみて、いろんな角度からこの街を眺めたいと思いました。

まちづくりのアイコン

三年程前、景観やまちづくりといったものに関心を持ち始めてすぐに郡上八幡の名は耳に入ってきました。「水路を活かしたまちづくり」、「水でつながるコミュニティ」、「むかしながらの湧き水を使った暮らし」、思えば郡上八幡の名の前にはいつも美しい枕詞がついていました。ちょうどこの数年來日本におけるまちづくりの要諦は水であるというような議論が盛んに交わされ、様々な自治体や地域が水を中心としたまちづくりに注目していることもあってか郡上八幡という地域は日本のまちづくりの成功例の嚆矢としてある種のアイコンになっているのではないかという気がします。

これまで郡上八幡を褒め讃える論評やら記事やらエッセーを散々読んでいたので、今回幸いにもGSユースの企画として郡上八幡を見学できるという話が来たときに一人の観光客兼まちづくりに関心を持つ者として非常に楽しみに思うと同時に、今まで見聞してきた美辞麗句に眼を曇らされることなく、まちのあるがままの姿を少しでも感じて帰りたいなと思いました。

以下簡単なものですが、感想です。

第一印象「あれ、ここもう郡上八幡？」

車を運転しながら郡上八幡に入ったときに、郡上八幡に入ったのだと言う実感をあまり感じることなく郡上八幡に着いたということがまず印象的なことでした。これはどういうことかという郡上八幡は大袈裟な伝建地区や立派な建造物などを売りにした場所ではなくあくまで自然体の当り前の暮らしの雰囲気になんとなく価値を感じる場所

だと言うことなのではないか思います。これは川越や倉敷などの伝建地区に入るときの感覚とまったく異質のものです。

住民の方がしばしば「みんななんしに八幡までまちを見に来るのかわかんねえ。」ということをおっしゃるといような話を伺いましたが、それは八幡にくらす方々があくまで当り前のように自然体で暮らしているということの証左で、そこに持続性というか、無理のなさがあるのではないかと思います。

当り前さに潜む危険性と当りませのしんどさ
ただし、その当り前さのなかにこそ実は危険が潜んでいるのではないかと思います。なぜならなにが当り前かというのは時代によってどんどん移り変わっていくからです。それなりに外から来る人の眼を気にしつつも、基本的には（住んでいる方にとっての）当り前の暮らしをしている郡上八幡の人々は、自分たちの暮らす街の良さがどこに宿っているかについて他の伝建地区などと比較すれば無自覚になりやすいのではないか。あるいは気付いていたとしてもそれは他のなんらかの価値、たとえば便利さとか快適さといったものと交換するだけの価値があるものかということに関して疑念を抱きやすいのではないかと懸念します。

外から来る人とかまちづくりの専門家が褒めるから、喜んでくれるから、カワドの暮らしを守ろうとはなかなか思わないはずですが。観光客がお金を落としてくれるから、という理由だけでは真のカワド文化は守られることはないでしょうし、そも

そも観光収入を当てにして暮らしている人が八幡に暮らす人のなかでどれくらいの割合いるのかという疑問もあります。先祖から引き継いだ暮らしを守ろうという意思是成立すると思いますが、日本の世の中で宗教的な理由がある場合などを除けばそういった意思だけで相対的に不便な暮らしを続ける人は少数なのではないかという印象があります。

若い人を中心にカワド離れが進んでいたり、車を利用する人を中心に水路にフタをするケースが増えているとのことですが、上に挙げたようなことを考えるとそれはある意味では当然のことであるし彼らにとってそれがより豊かな暮らしであるならばそれを非難する権利は誰にもないのかもしれないと思います。

少なくともソトモノである私たちが喜ばすためにまちづくりがあるわけではないと思うので、郡上八幡のあの自然体の中に宿る良さのようなものは果たして持続していくんだろうかと心配に思った部分がありました。それが、当たり前さに潜む危険、ということです。

そして街を大きくぐるっと歩いたときに、意外に空き屋が多いこと、杉林が荒れていること、農林業の気配があまりしないことなどが気になりました。名古屋まで高速道路を使えば一時間強ですから若い人は都市部での仕事で生計を立てているケースが多いのかなという印象をもちました。

つまり日本の至る所にある普通のまちがもつしんどさを郡上八幡も当たり前のように抱えているのではないか、ということです。霞ヶ関の役人や県庁の人などは地場産業の振興をいうことを声高に叫びがちですがことはそう簡単でないはずで

この当たり前のしんどさは日本全体の問題ですが、それが郡上八幡にも存在するという事に納得すると同時になんとなく心暗い気がしないこともありませんでした。

地域力という希望

ソーシャルキャピタルという横文字はどうもしっくりこないので、同じような意味として地域力という言葉を使わせて頂きます。僕がここまで述べてきたような勝手な懸念はありつつも、水路掃除当番を地域の人が担当したり、まちで起きていることを“ひとごと”や“行政のやること”とは捉えず、自分のまちの自分の地域の問題として捉える地域力は他の地域と比べてすごいものがあるのだろうと思います。ひょっとしたら、水路があるとかカワドがあるとか、昭和期の建物が残っているとかがいったことは実は郡上八幡の本質ではなくそういったものを皆で考えることから培われる地域力こそが本質的なものなのではないかということ考えます。そこにソトモノは関係ありません。あくまで郡上八幡の中で完結する問題であるし、それだけにぶれにくいものだろうと思います。水路で遊ぶ子供たちや、僕たちが水路掃除をお手伝いしていたら『見ちゃいられんわ』とばかりに凄腕を見せてくれたおばあちゃんに希望のようなのを感じます。次代の郡上八幡を担う子供たちに地域力が養われるか、それが最も大切なことだろうと思います。まちづくりやデザインはそれを養うための一助となればよいのだろうと思います。

・感想[企画者]

□東京大学大学院 永山悟

反省

最後に会計がごたごたしてしまったのは大いに反省。

他にも、事前準備がおろそかすぎた。佐々木先生との事前打ち合わせ、柳町町並み保存会の方々への直接の連絡等。今回はうまくいったからいいものの、今後は気持ちを引き締める必要がある。

運営のススメ

今回、中村さんが主に運営を担ってくれ、僕も補佐的に運営をしたが、本当に運営をして良かったと思った。理由は以下の2点。

1. 事前にかなり勉強して見学会に挑むため、現地で得る情報が自然に定着する。地理や利水施設のこと等。
2. 講師や住民の方と話がしやすい。人脈もできるし、町の事もより詳しく聞ける。

2の観点から言うと、極力ユースの代表以外が運営すべきである。なぜなら代表はどちらにしる講師や住民に挨拶をするから。

今後の見学会について

前回の琵琶湖、今回の郡上八幡と、「町歩き系」の見学会が続いた。そして両方ともすばらしい見学会となった。これまでの「作品見学系」の見学会に比べて僕個人的な満足度は高い。かといってユースの活動として「町歩き系」ばかりしていれば良い訳でなく、いろいろなものを見て、参加者同士で議論し、自分のデザインの糧として定着させることが重要である。

ということで、今後も「デザイン」という言葉のもと、楽しく、新鮮な見学会を期待したい。そしてもっと多くの人に参加してくれたら幸いである。

・会計報告

収入				備考
会費	¥16,500	17	¥280,500	
援助	¥56,800	1	¥56,800	講師謝礼金、交通費、宿泊費に利用
計			¥337,300	

支出				
レンタカー	¥14,700	4	¥58,800	
高速道路+ガソリン	¥24,120	1	¥24,120	
宿泊（朝食付）	¥6,000	17	¥102,000	
1日目昼食	¥1,000	20	¥20,000	
懇親会 一次会	¥3,000	18	¥54,000	
懇親会 二次会	¥18,300	1	¥18,300	
市民会への土産	¥2,610	1	¥2,610	
講師謝礼金	¥20,000	1	¥20,000	
講師交通費	¥30,000	1	¥30,000	
講師宿泊費	¥6,800	1	¥6,800	
計			¥336,630	

残金	¥670	報告書作成費に利用
----	------	-----------

・写真





